

## バタイユ 対／と ブルトン

—— 『ドキュマン』と『シュルレアリスム第二宣言』をめぐる ——

白石敬晶

1929年、『シュルレアリスム革命』誌12月15日号（終刊号）は、アンドレ・ブルトンの署名で『シュルレアリスム第二宣言』<sup>2)</sup>を發表した。これは周知のように当時共産党との軋轢から分裂の危機に瀕していたシュルレアリスムを再建するため、その前半部を守るべき原則の再確認にあて、後半部をシュルレアリスムからの離脱者に対する激しい批判にあてたものである。その批判の矛先が最後にジョルジュ・バタイユに向けられているのは、彼がシュルレアリスム離脱者たちの中心的存在となっていたばかりではなく、同年4月に創刊された『ドキュマン』<sup>3)</sup>誌に極めて挑発的で、反「観念論」的な、つまりは、反シュルレアリスム的な文章を發表していたからに他ならない。

しかしブルトンとバタイユの対立は極めて両義的であって単純に「敵対」と呼ぶことができるようなものではなかった。

ブルトンは『第二宣言』であれほどきびしくバタイユを断罪したにもかかわらず、後に「私の人生にとって、知るといふ苦勞に値した人々のひとり」と回想したとされている<sup>4)</sup>。バタイユの方もブルトンに対して、シュルレアリスムの「首謀者の残忍さと功妙さから発散していたのは道徳的恐怖であった」<sup>5)</sup>と嫌悪を表明する一方で次のように高く評価しているからである。

おそらくこの二、三十年以来、アンドレ・ブルトンほど、ささいな行為にまで人間の運命をかかり合いにする意味を与えようとする配慮を表明した者はいなかった。それが現存するいかなる作家もおよばぬ、揺さぶり、引き込む力の理由である<sup>6)</sup>

このような二人が思想的に最も深い対立を見せたのは『ドキュマン』と『第二宣言』、そしてその『第二宣言』に対する反論として書かれたバタイユの『「老いたもぐら」と超人および超現実主義者なる言葉に含まれる超という接辞』<sup>9)</sup>においてであった。ここに見られる対立を探ることによって、その両義性と両者をつき動かしているものを明らかにしたいと思う。

### 観念論と唯物論

『ドキュマン』におけるバタイユの中心的モチーフは次に見られるように観念論から解放された唯物論を打ち立てることであった。

今や、唯物論という言葉が用いられる場合、それは宗教的な関連のもとで練り上げられた観念論的分析の断片的要素に立脚した体系ではなくて、生の諸現象の、いかなる観念論をも排除した、直接的な解釈を示す時である<sup>9)</sup>。

そしてバタイユにとって敵対すべき観念論の最大の象徴がヘーゲルとその観念論的弁証法であった。当時のバタイユにとってヘーゲルの弁証法とは、互いに全く異質なものとして存在するはずの観念と自然との間に超越的な（観念論的な）視点から、ありもしない共通の枠組を設定し（テーゼとそれに対するアンチテーゼと見なし）、その間にある異質性を矛盾と呼んで、それを止揚することにより高次の総合（ジンテーゼ）へと導く、つまり体系的秩序（ヒエラルキー）を形成する論理的還元装置に他ならない。そしてこの還元装置は、両者の絶対的異質性に気づかないということによって誤謬であり、観念論的なものにしか過ぎないのである。

ただし、バタイユが弁証法を全否定しているのではないことに注意しよう。

弁証法的思考を排斥することが問題なのではない。そうではなくて、知ろうとしなければならぬのは、前述の意味で弁証法の適用がどこから有益であるかという、その限界なのである<sup>9)</sup>。

このような視点に立てば、ヘーゲルにおいては弁証法の有効性の限界が無視されていることになるだろう。

そしてこの視点からシュルレアリスムに対する原理的な批判が展開されるのである。

自我と非・自我の抽象的な二律背反に始末をつけることは余りにも容易である。ヘーゲル的な弁証法が、このような手品を操作するために全く意図的に構想されているからである。最も目ざわりな反乱が最近、関連の不在はひとつの別の関連であるとする命題と同じくらい皮相な諸命題の言いなりになっているということを、今や確認すべき時である<sup>10)</sup>

ここで「最も目ざわりな反乱」と呼ばれているのはシュルレアリスムであり、攻撃されているのはそのヘーゲル的な弁証法的側面である。つまりシュルレアリスムは観念論であるとして批判されているのだ。バタイユの立場からは、関連が不在であるということと、「関連が不在である」という関連が存在しているということとを同一視することはできない。「不在」は存在の一形態ではなく「存在の否定」という異質で自立的な原理だからである。それをふまえることがバタイユの唯物論であり、そのことを無視して（気づかないで）それを同一視するシュルレアリスムが、バタイユの目に、体系的な完全無欠性をめざすために他の全てを犠牲にするというヘーゲル的観念論の誤謬に落ち入っていると見えたであろうことは想像に難くない。

ところでバタイユがシュルレアリスム批判においてヘーゲルを持ち出したことに対するブルトンの答えは次のようなものである。

ヘーゲルが主としてその責任を負わされていることについて、われわれは別に不都合を感じない<sup>11)</sup>

ただし、ここでブルトンが「不都合を感じない」のはヘーゲルにおける弁証法的運動であって、その観念論的側面でないことは次のような一節からも明らかである。

シュルレアリスムは、現実と非現実、理性と非理性、熟考と衝動、知と「宿命的」無知、有用性と無用性、等々の概念を審議する道へと特に入り込むとしても、少なくともヘーゲル的体系の「巨大な流産」から出発しているという点で史的唯物論との類似を示している。否定と、否定の否定とに決定的に馴らされた思考の操作に、限界を、例えば経済的な枠組という限界を設けるということは、私には不可能なように思われる。——中略——ところで、憚らずに言えば、シュルレアリスム以前にはこの意味で体系的なものは何も作られていなかったし、われわれがそれを見出した時点では、われわれにとってもまた、ヘーゲル的形態のもとでは弁証法的方法は適用不可能だったのである。われわれにとってもまた、いわゆる観念論と手を切る必要があったのである<sup>12)</sup>

ここに述べられている限りでは、弁証法的な思考の操作に無限の適用可能性を見ている点を除けば、観念論と（史的）唯物論に対する態度はすでに見たバタイユのそれとほとんど変わるところがないように見える。それにもかかわらず「唯物論」をめぐる対立が起るのは、両者におけるその概念規定に相違があるからである。

すでに見たようなバタイユの観点からすれば、いかに史的唯物論との類似を強調しようとも、次のような、後に至高点と呼ばれて、シュルレアリスムの要となる精神の一点を求める弁証法的思考自体が観念論と見なされるだろう。

あらゆることから考えて、生と死、現実と空想的なもの、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高いものと低いものが、そこからはもはや矛盾とは感じられなくなる精神の一点が存在すると信じられる<sup>13)</sup>

これに対してブルトンの側からはバタイユの唯物論は次のように断罪される。

これほどよく知られていることもないのだが、バタイユ氏と共に、われわれは古い反弁証法的な唯物論の復帰に立ち合っているのである——中略——それは、ここでは「史的唯物論」と規定されていないので（それにどうしてそんなことができようか）表現という哲学的観点においては漠然と

しているし、新しさという詩的観点においては、無に等しいと見なさざるを得ないのである<sup>14)</sup>

ここで注目すべきは「古い反弁証法的」という言葉であろう。すでに見たようにブルトンは弁証法的思考に無限の信頼を置いているのであるから、唯物論と主張されていても、バタイユの唯物論は弁証法の運動を取り込んでいないという限りにおいて有効性を認めることができないのである。

この主張はブルトンの立場からすれば極めて一貫性のあるバタイユ批判となっている。しかし、バタイユに対する、批判としての有効性は疑わしいと言わざるを得ない。というのは、すでに指摘した（引用 9 参照）ように、バタイユは、ブルトンが批判の根拠としている弁証法の有効性を相対化しているからである。

ともかく、以上でブルトンとバタイユにおける観念論と唯物論をめぐる態度は明らかになったと思う。次にそのような態度へと両者をつき動かしているものを探ってみよう。

### 一元論と二元論

『シュルレアリスム第二宣言』におけるバタイユ批判は「古い反弁証法的な唯物論」の他に次の三点へと向けられている。

第一にバタイユのエクリチュールに内在する逆説<sup>15)</sup>

バタイユ氏の場合は、次のような逆説的で、彼にとってやっかいな問題をはらんでいる。すなわち彼の「観念」恐怖症は、彼がそれを伝達しようとするや否や観念論的な輪郭を取らざるを得ないのである<sup>16)</sup>

第二に思想と実生活との間の矛盾。

（もしバタイユがサドに関して反論してくるなら）私はこう答えるだろう。そのような抗議行為が、その異常な効力を失うには、それが自分の思想のために生涯のうち二十七年間を牢獄で過ごした人間の行為ではなくて、

図書館に「座した男」<sup>17)</sup>の行為であるというだけで十分であろうと<sup>18)</sup>

第三にバタイユにおける汚穢，墮落嗜好。

注目すべきなのは、バタイユ氏が「けがれた」とか「老いぼれた」とか「むっとするような」とか「さもしい」とか「みだらな」とか「もうろくした」とかいう形容詞を錯乱的に濫用することであり、それらの言葉は彼が事物の耐えがたい状態をけなすのに役立つどころか、それによって彼の歎喜がもっとも抒情的に表現されるものだけということである<sup>19)</sup>

第一，第二の批判に共通するのは、逆説や矛盾を排しようとするブルトンの合理主義的志向である。しかもこの志向は極めて一元論的なものであってブルトンを根源からつき動かしているように思える。というのはこの一元論的合理主義的志向は『シュルレアリスム宣言』（1924）<sup>20)</sup>からすでに一貫して認められるものだからである。

『シュルレアリスム』 男性名詞 純粋な心的現象であって、それを通じて、口頭，記述，その他のあらゆる方法によって思考の真の働きを表現しようとする。理性によって行使されるいかなる統御も不在の場で、そしてまた美学的なあるいは道徳的ないかなる配慮も行なわれない場での思考の書き取り<sup>21)</sup>

ここに見られるシュルレアリスムの定義（自動記述に同一視される）に理性よりも、非合理的な無意識に対する期待が読み取れるとしても、理性の上位に無意識という非合理的な「思考の真の働き」を置くという新たなヒエラルキーを形成する運動を読み落とすべきではない。「思考の真の働き」という一元論的な価値に収斂するヒエラルキーである。とすればここではこの非合理的なものが極めて合理的に、つまり逆説や矛盾をはらまぬ方法でめざされているということになる。

そしてシュルレアリスムがめざすこの「思考の真の働き」が、『第二宣言』において、弁証法の運動に取り込まれ、さまざまな二項対立の矛盾を止揚した

「至高点」（引用13参照）へと変貌しているとしても、ブルトンの一元論的合理的な志向の延長線上にあることに変わりはない。というのも弁証法の与件が矛盾として対立する二項という二元論的なものであるとしても、それが止揚されることによってひとつの総合へと導かれるという限りで一元論的な体系、ヒエラルキーを形成するものだからである。そしてこのような体系にあっては、二元論的なものは矛盾として克服されるべき過渡的な存在形態にしか過ぎないし、ヒエラルキーの下位にあるものは高位にあるものに従属しているに過ぎないのである。

とすれば、ブルトンのバタイユ批判が、その「逆説」や「矛盾」を衝くという形態をとり、ヒエラルキーの高みから「汚穢嗜好」を攻撃するという方法をとるのは決して偶然ではないであろう。

これに対してバタイユの思考は明らかに二元論的である。それは弁証法の有効性に限界を設定して（引用9参照）次のように内部と外部という二つの異質な領域を考えることからもうかがえるだろう。

低次の物質は人間の理想的渴望の外部にあって無縁のものであり、この渴望に由来する存在論の偉大な機械に還元されることを拒否している<sup>2)</sup>

「低次の物質」というのは、例えば人間の場合には精神に対する自然性そのものとしての肉体ととらえてよいだろう。つまり観念に対する絶対的異質性としてあるために、観念体系への論理的還元が不可能な存在のことである。

ここで「低次の」《bas》という形容詞に注意しよう。ここでこの形容詞は決して価値の低さを表わしてはいない。言わばバタイユによって価値のヒエラルキーから引き剥がされて用いられているのだ。それは「理想的」《idéal》という形容詞についても同様である。バタイユの抛って立つ唯物論が「生の諸現象の、いかなる観念論をも排除した、直接的な解釈」である以上、

哲学者たちに常用されている抽象的概念に自然の形態を置き代えることは奇妙であるばかりではなく不条理であるだろう。たとえ嫌悪の念を持ってにせよ、哲学者自身が、ちょうど下劣さ《bassesse》と言う場合のよう

に、その価値を自然の中でのこの形態の形成に借りている用語にしばしば頼らねばならなかったということもここではおそらくほとんど問題にはならないだろう<sup>23)</sup>

つまりバタイユは用語のレベルにおいても観念論的還元を慎重に排除することによって、ヒエラルキーを形成しないことを実践しているのだ。そうすることによって初めて「低次の物質」と「理想的渴望」とが価値のヒエラルキーの中で優劣をつけられることなく、対等にその存在を主張することができるだろう。

このような二元論的共存と拮抗の状態こそがバタイユにとって合理的であることは言うまでもない。とすればバタイユにあっては、シュルレアリスム（ブルトン）とは対照的に、合理的なものが極めて非合理な方法（なぜなら「低次」という語が価値の低さを表わさず「理想的」という語が「望ましい」という意味を持たないのだから）で求められていることになる。

ところで、バタイユのこの反ヒエラルキー的な実践がブルトンには汚穢、墮落嗜好と映ったのである。確かにブルトンの指摘するように「けがれた」とか「みだらな」という言葉が、「事物の耐えがたい状態をけなすのに役立つどころではない」のだが、必ずしもそれが「医学か悪魔抜いに属するもの」<sup>24)</sup>と見なすことはできないだろう。

バタイユにとってはそのような言葉を「事物の耐えがたい状態をけなすのに役だてない」ことこそが問題なのである。それこそが主張（意味内容）としてではなく実践（形式）として観念論を排除することだからである。

このようにしてヒエラルキー自体を解体しようとするバタイユは当然次のように、シュルレアリスムをヒエラルキー（たとえそれが今までのものとは別の新しいものであるとしても）を作りあげてしまうものとして断罪することになる。

この同じ傾向が、もちろん、高級至純の諸価値の優越性を保持している現在のシュルレアリスムの中に見出される（そのことはシュルレアリスム（超現実主義）に超という言葉がついていることから明らかであるし、ニーチェがすでに超人という言葉を使うことによって落ち込んだ畏である）。



もっと正確に言えば、シュルレアリスムは低級な諸価値（無意識、性的活動、卑猥な言葉など）を持ち寄ることによって直接に異彩を放っているのだから、それらを最も非物質的な価値に結びつけることによって、それら低級な諸価値に卓越した性格を与えようとしているのだ。<sup>25)</sup>

これまで見てきたバタイユのシュルレアリスム（ブルトン）批判が、ブルトンのバタイユ批判と違って、相手の矛盾を衝くものではないということに注意しよう。バタイユの方法論が、方法自体に矛盾や逆説をはらませることによって、二元論的な共存と対立を同時に実現しようとするものである以上それは決して偶然ではないのである。バタイユの批判は、ブルトンにおける論理の矛盾を指摘するのではなく（それどころか次のような評価さえしている。「『第二宣言』は疑いもなく、かつて試みられた文書のうち最も首尾一貫したものであり、最も堅固な声明である。<sup>26)</sup>」）ひたすら原理的な誤謬を指摘し続けているのである。

#### 註

引用は拙訳。ただしすでに翻訳のあるものについてはそれを参考にさせていただいた。

- 1) *La révolution surréaliste.*
- 2) *Second manifeste du surréalisme.*
- 3) *Documents.*
- 4) G. BATAILLE, *Le surréalisme au jour le jour* in *Œuvres Complètes de Georges BATAILLE*, VIII, p. 177, 以下O.C.,VIII. のように略記する。
- 5) *Ibid.*, p. 178.
- 6) G. BATAILLE, *Le surréalisme et sa différence avec l'existentialisme*, in *Critique*, 1946, No 2, p. 99.
- 7) G. BATAILLE, *La "Vieille Taupe" et le préfixe sur dans les mots surhomme et surréalisme* (écrit en 1931 pour *Bifur*) in *Tel Quel*, 1968, No 34, 以下 *La Vieille Taupe* と略記。
- 8) G. BATAILLE, *Matérialisme*, in O. C., I. p. 180.
- 9) G. BATAILLE, *La critique des fondements de la dialectique hégélienne*, in O. C., I. p. 286.

- 10) G. BATAILLE, *Figure humaine*, in O. C., I. p. 183.
- 11) A. BRETON, *Second manifeste du surréalisme*, in *Manifestes du surréalisme*, éd. J. J. Pauvert, 1972, p. 185. 以下 *Second manifeste* と略記。
- 12) *Ibid.*, p. 148.
- 13) *Ibid.*, p. 133.
- 14) *Ibid.*, pp. 185-186.
- 15) この「逆説」については拙論『ジョルジュ・バタイユのディスクール』（『広島大学フランス文学研究 1』1982所収）参照。
- 16) *Second manifeste*, p. 186.
- 17) 当時バタイユはサドの「スキャンダラスな作品」に匹敵する『眼球譚』*Histoire de l'œil*, 1928をLord AUCH という偽名で書いていたが表向きは国立図書館員として働いていた。
- 18) *Second manifeste*, p. 188.
- 19) *Ibid.*, p. 187.
- 20) *Manifeste du surréalisme*.
- 21) A. BRETON, *Manifeste du surréalisme*, in *Manifestes du surréalisme*, éd. J. J. Pauvert, 1972, p. 35.
- 22) G. BATAILLE, *Le bas matérialisme et la gnose*, in O. C., I. p. 225.
- 23) G. BATAILLE, *Le langage des fleurs*, in O. C., I. p. 178.
- 24) *Second manifeste*, p. 186.
- 25) *La vieille Taupe*, p. 12.
- 26) *Ibid.*, p. 13.